

宗教は「いのち」をどう語ってきたのか？
—近現代における「いのち」観の変遷—

オーガナイザー：島菌進（東京大学）、葛西賢太（宗教情報センター、企画者）

シンポジスト：1. 金子昭（天理大学おやさと研究所）

2. 土井健司（NCC 宗教研究所・関西学院大学神学部）

3. 新田智通（武蔵野大学仏教研究所）

当セッションは、「いのち」の尊厳についての諸宗教の言説を対象とし、その多様性を通時的・共時的に吟味する方法により、現代の自明視から解放された「いのち」観を提示することを目的とする。

「いのち」の尊厳という価値観は、普遍的に通有され、また人類の歴史を通じて尊重されてきたとみなされがちである。この価値観は、医療の場をめぐる議論、文部科学省『心のノート』、さらに首相の所信表明演説に至るまで、日常的に語られているためである。だが私たちは、これが普遍的に通有されまた人類史を通じて尊重されてきたとする見方に疑問を呈したい。宗教史上の「いのち」をめぐる議論が見落とされているからだ。

「いのち」の尊厳の通有と尊重をめぐる思い込みの一因は、個々の宗教やその現場の多様性を捨象した、抽象的な「宗教一般」ばかりが便宜的に参照されてきたためであろう。「宗教では……」「とにかく宗教は……」と語るとき、それぞれ特定の宗教を想定しつつそれを一般化して語ることが多いが、この一般化は問題にされにくかった。

本シンポジウムの報告者は、いずれも宗教者にして宗教研究者でもある。島菌座長を除き、教団付置研究所懇話会という対話・考察の場を共有し、共通の話題について具体的な議論を蓄積してきた。島菌座長はその取り組みの理解者として参加された。

報告者は、それぞれの立場から「いのち」観を具体的かつ批判的に考察し、自明視されてきた「いのち」の尊厳について、諸宗教の文脈において検証し提示する。この作業によって、宗教が〈語った〉（言語化した）あるいは〈語ってこなかった〉「いのち」観の詳細な変化が吟味できる。さらには、それを〈説く必要がなかった〉時代と社会との対比で、現代の有様も浮き彫りにしうるだろう。

金子昭は、新宗教の「いのち」観に通底する“現世救済”理念がはらんでいる、超越性と臨床現場での救済との二面性を、天理教を例として報告する。また、土井健司は、キリスト教神学における生命倫理の牽引役を果たした神学者R・マコーミックの生命観を考察し、「生命の質（その生命にはどんな価値があるか）」という彼の問いを吟味する。また新田智通は、近年の真宗大谷派において「いのち」という語が多用されている現状に認められる生命崇拝的傾向につき、大谷派教学の特色に照らしながら批判的に考察する。

90 分の配分

趣旨説明(葛西)	5分
金子昭	15分
土井健司	15分
新田智通	15分
パネルどうしの質疑(事実関係確認)	10分
フロアとの討議	30分